第３群の座長をつとめて

山　田　美千代
（金沢医科大学病院）

第17回石川看護研究会学術集会の第３群の座長を務めさせていただきました。第３群は日常自分たちが行っている看護ケアの実態を明らかにし今後のケアの方向性を見いだそうと取り組まれた４演題の発表でした。

第１席の公立つるぎ病院、広川由美子さんは慢性期疾患をもつ高齢者の家族への援助の実態を把握するため看護婦を対象に調査を行い、「個々の家族成員に働きかける援助」の平均値が高く援助ができていたが「家族成員の関係に働きかける援助」の平均値が低く今後この点について働きかけてゆく必要があると発表されました。質疑で調査の枠組を明らかにして属性の根拠をもって検討することが必要であるとご指摘をいただきました。平均値の低い項目はその必要性の是非と必要時看護婦は対応できていたかについての質問に対し全ての患者に必要はなく、また「家族と家族をとりまく社会の関係性に働きかける援助」に対して婦長が役割を担っている部分があり平均値が低くでていると考えられ看護婦が対応する機会が少ないとの返答でした。

第２席の金沢社会保険病院、坂下嘉子さんは仕事を持ちながら定期受診を継続している患者の待ち時間の感じ方や定期受診を続けている思いを調査し、待ち時間に対し不満がある一方習慣化という待ち時間が苦痛にならない思いもあたっと報告され、それは対象者に糖尿病の病識があり前向きな健康観を持っているため待ち時間の負担があっても受診継続につながっていると発表されました。質疑では具体的な待ち時間についての質問に対し、調査時は専門医１人の外来であり約90分の待ち時間があったが現在専門医が２人となり約60分に短縮していると返答がありました。今後は受診が継続されない患者への働きかけが課題となりました。

第３席の金沢大学医学部附属病院、永井千賀子さんは多床室における患者のプライバシー意識の関連要因について分析を行い患者の公的自意識、性別、年齢において関連を認め、公的自意識の強さや男性であることはプライバシー侵害意識の増加に、また年齢が高いほどプライバシー侵害意識の低下に関連していると発表されました。質疑では中央と両側のベッドでの有意差についての質問に対し有意差はないとのことでした。多床室においての個人のプライバシーについて再認識させられる発表でした。

第４席の金沢医科大学病院、坂井宏美さんは自己効果理論を取りいれた虚血性心疾患患者の教育プログラムに基づきリスクファクターの改善行動へのアプローチを行った３事例を検討し、ＳＥ得点が入院時より退院時に高くなり、アクションプランを患者自身が立案・実行すると改善行動の継続ための自信につながったと発表されました。質疑では業務のなかで患者指導をどのように継続したかの質問に対し看護婦が２人一組で担当し指導内容を統一しながら継続したと返答がありました。事例２について現在禁煙に関する新しい考え方がありそれを取り入れてより効果的な指導に役立てたらどうかとのご意見をいただきました。禁煙に対する適切な教育・指導方法の再検討が課題となりました。

第３群は日々の看護ケアの実態を評価しより質の高い看護ケアを提供したいとの意欲がみられ、今回の学術集会のテーマを反映した研究だったと思います。研究方法など未熟な点をご指摘いただきましたが今回の研究成果とご意見を日常の看護ケアに還元され、その成果を再び報告いただけることを期待します。

最後に、活発な質疑応答を頂いたものの質問者と発表者との橋渡し役として不十分でしたことをお詫び申し上げます。そして座長という貴重な経験をさせていただきましたこと、皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。